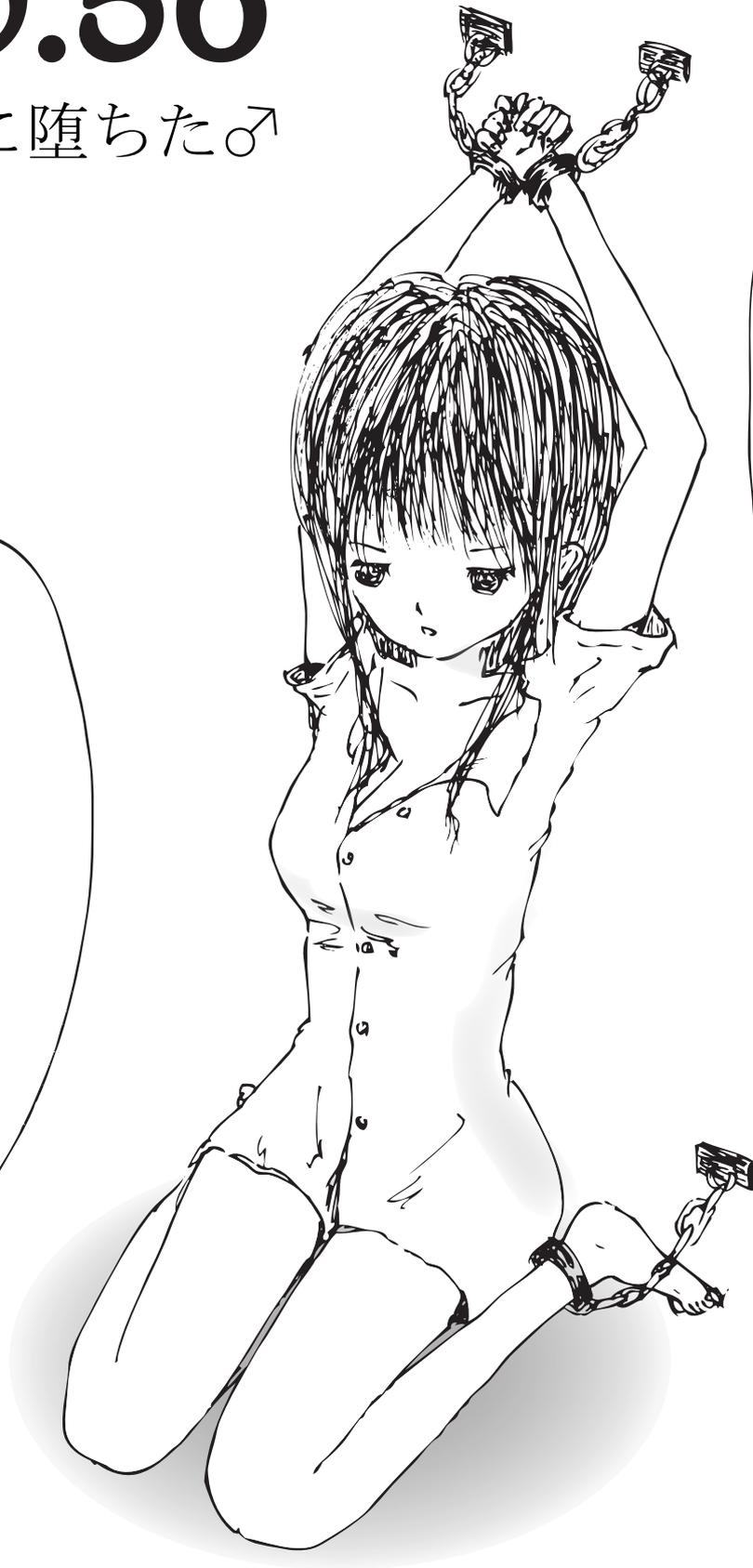


# NO.56

♀ 女隷に堕ちた♂



私は誰だったのかな

今はただの  
おもちゃだけど

# Day 1

「離せよ、触んなーっ」

NO.56の言葉は凍てつく収容所の壁を伝って虚しく響いていった。人権などという言葉はここでは何ら意味を持たない。彼らは人間として扱われていないのだ。家畜、モルモット、良くて奴隷程といったところか。

2100年、ヒトゲノムの完全に解読してから数十年で、人類は遺伝子工学を神の領域にまで進歩させたように思われた。もはや、人間の潜在的能力など、生まれたての赤ん坊の時点で明らかになる。あの天才ピアニストがあんなに美しい音を奏でるのも、あの天才科学者があんなに優れた論文を発表するのも全ては遺伝子工学のおかげだった。多くの優れた才能が埋もれずに開花していくのを目の当たりにして、誰もが遺伝子工学の偉大な功績を賞讃した。しかし、科学の進歩は同時に負の側面をもっていた。優れた才能がDNAに記されているように、人間の凶悪な性質もまたDNAに記されていたのだ。

「お前はType-Dなのに幸せ者だな、NO.56」

今度は看守のあざ笑った声が、広い収容所に声高に響いた。Type-D、それはこの世界で今最も忌み嫌われている言葉のひとつだろう。なにせ、Type-Dと呼ばれるDNA群をもつ人間は凶悪犯罪を将来引き起こす可能性が高いことが明らかになってきたからだ。この生まれながらにして不幸なType-Dの人間たちは、特別な場合を除いてはこの収容所で一生を過ごすこととなっていた。彼らに対する社会の目は厳しく、彼らに収容所を出る機会をごく僅かしか与えられていなかった。ひとつは、彼らが将来的に凶悪犯罪を引き起こさないことが保証されたとき。もうひとつは、彼らが死んだとき。NO.56は幸運にも生きたまま収容所を出る事を許された数少ない一人だ。しかし、十×年間ずっとこの収容所でゴミのように扱われてきたNO.56の目は疑り深く看守を見つめていた。

「今更、オレを出してくれるってのは本当なのかよ、信じられねーよ」

「ああ、残念ながら本当だ、ただし…」

看守はそう言いながら、NO.56の身にこれから起こることを想像してひとりほくそ笑んでいた。

「ただし、お前がこの新薬の投与を受け、今後犯罪を起こさないことが保証されたらの話だ」

NO.56はますます疑り深い表情を見せた。

「新薬の投与だと？どうしてそれでオレが犯罪を起こさないなんて言い切れるんだよ」

その言葉を聞いて、看守はますますほくそ笑みながら言った。

「おお、そういうえば、NO.56よ。お前はなぜType-Dなのかを知らない。この際、教えてやろう。」

収容所の人間は自分が将来どのような凶悪な犯罪を引き起こすかもしれないなんて、全く知らされて

はいなかった。NO.56も十×年間の理不尽に抱き続けた疑問の答えを知りたがった。

「なんでオレはType-Dなんだよ、教えるよ」

もったいぶりながら看守は続けた。

「お前は…将来、凶悪な性犯罪を犯す可能性が高いためにType-Dなのだ。正確にはType-D41、強姦、レイプなんて当たり前、そういう輩のDNAをお前は持っている。」

NO.56は俯いた。まるで当たらない占い師のお告げのような看守の言葉だが、遺伝子が伝える情報は、どんな弁護士の言葉よりも説得力があった。

「じゃあ、この新薬は…?」

「この新薬には、体内のY染色体をX染色体に変化させる効果がある。簡単に言ってしまうえば、性転換薬だ。人間に投与した報告例はない。お前にとっては、モルモットとして初めて社会の役に立てるいい機会だろう。」

NO.56は震えていた。

「いやだ…オレは受けない、そんなうさんくさい新薬の投与なんて…」

看守は、いかにも信じられないというような顔をした。

「言っておくが、お前に断る権利などないのだ。新薬の投与は受けてもらう。」

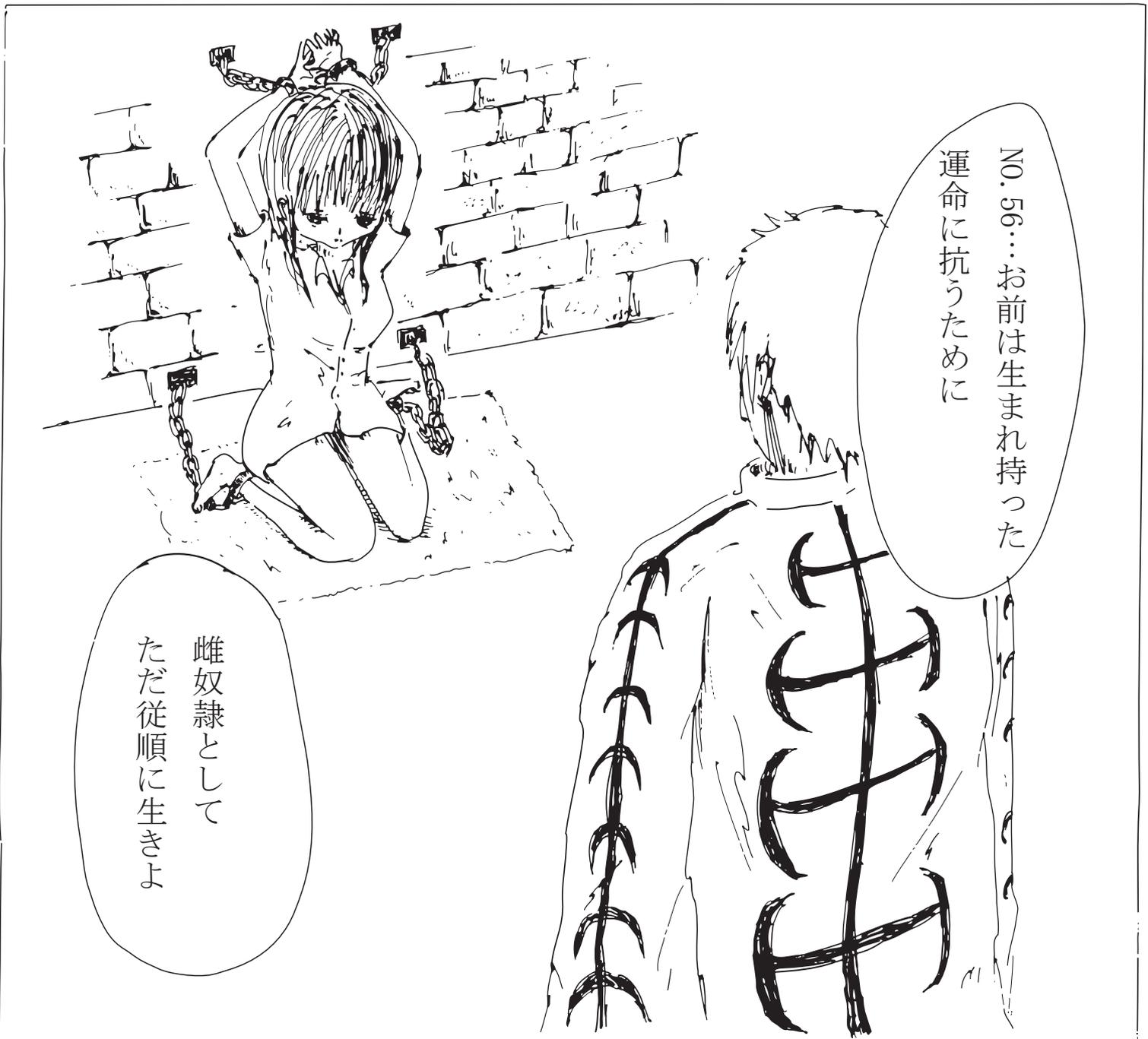
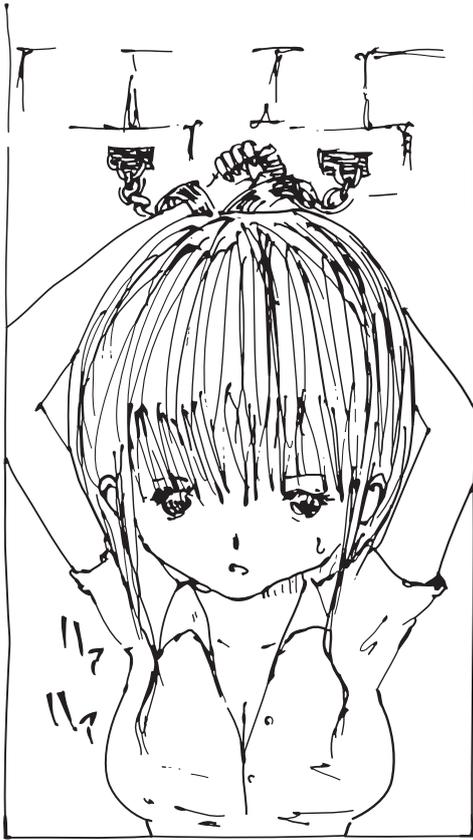
そう言っつて、看守は周りの部下に目配せをして、NO.56の体を壁の鎖に結ばせた。身動きが取れないことと、これから自分の身に起こることがNO.56をどうしようもなく恐怖させた。

「やめろよ、離せつ、いやだ」

悲痛な叫びも虚しく、看守はためらう事なくNO.56の首筋に新薬を注射した。打って数秒だった、NO.56の体温は急激に上昇し、動悸が激しくなり、意識がもうろうとし始めた。その様子を興味深く見つめながら看守は言い放った。

「それから、言い忘れていたよNO.56。お前を自由にする前に、お前が心底、性犯罪を起こす気がないことを確認するために、ある訓練を行う。心配するな、難しいことではない。ただ一年間、雌奴隷として調教するだけだ。長い歳月、自分の体を絶望的なまでもてあそばれば、性犯罪を犯す気もなくなろう。」

うつろな意識の中で、NO.56は深い絶望と諦めを感じていた。NO.56を気持ちなどあっけなく無視するかのように、体は急激に変化し始めていた。



あ...熱い

NO.56...お前は生まれ持った運命に抗うために

雌奴隷として  
ただ従順に生きよ